1　第46744号　【1892年3月26日第3種郵便物認可】

不登校2288人、3年連続増加

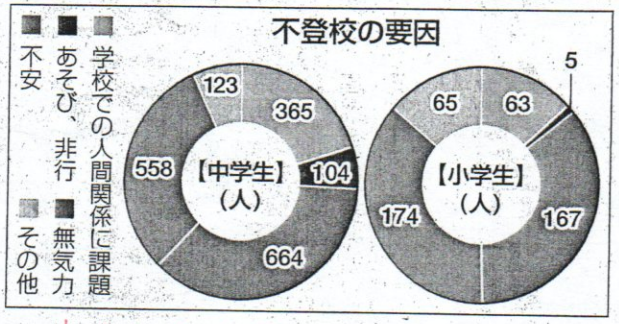
県内15年度の公立小中学校

小学生「不安」中学「無気力」

心理的要因高まる

県内の公立小中学校で、2015年度に病気や経済的理由を除いて年間30日以上欠席した不登校の児童生徒数は前年度比111人増の2288人で、3年連続で増加したことが23日までに、県教委のまとめで分かった。人間関係の構築に難しさがある場合や無気力など、心理的な要因による不登校が増加しているとみられる。県立高の不登校生徒数は5人減り664人だった。

中学生の長期欠席者は2181人で、不登校が全体の8割の1814人。前年度から50人増え、100人当たりの出現率は3・35%だった。小学生の長期欠席者は950人で、不登校が5割の474人。前年度比61人増で出現率は0・46%だった。



主な要因について、中学生は「無気力の傾向がある」が664人で最も多く、その理由（複数回答）は「家庭状況」が347人、学業不振が211人などとなった。小学生は「不安の傾向がある」が174人で最も多く、その理由は「家庭状況」が101人、「いじめを除く人間関係」が44人などとなった。

県教委は「子どもの欠席を容認するなど保護者の意識に変化がある。児童生徒の意思を尊重し、時間をかけて復帰を目指す指導が定着している」と分析。継続した対応や未然防止の重要性を強調した。

（宇留野有貴）